

シカ食害対策を複数取り入れた事業の取組について

国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター
九州整備局 造林係 田野中 大

1 課題を取り上げた背景

国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター（以下「センター」という。）は、水源林造成事業として水源涵養上重要な奥地水源地域の無立木地などを対象に、森林を造成する事業を行っています。森林の造成は、分収造林契約方式により行っており、造林者が植栽、保育及び造林地の管理、センターが費用負担の外、技術指導等を行うなど長期の契約を締結しています。

近年、シカによる植栽した造林木に対する食害被害が、全国的に深刻な問題となっており、センターにおいては約30年前から対策の一つとして獣害防護柵（以下「シカネット」という。）による造林木の保護に努めてきましたが、シカによる食害被害は減少していないことから当課題に取り組みました。

2 研究の経過

平成27年度にシカネットの被害原因の分析を行い、平成28年度は「補修パッチ」等を用いたシカネットの補修方法及びメンテナンスの強化、更に大苗の植栽と下刈省略の実証実験を行いました。

3 実行結果

シカネット設置やその後のメンテナンスの課題への対策として、①造林者の設置能力とセンター職員の指導力の向上、②適切な箇所への設置及び施工、③地拵及びシカネットの検査時の確認の徹底、④センターと造林者による「効果調査」の実施、⑤センターと造林者の被害状況の共有、⑥シカネットの補修の徹底、が必要と考えました。

その結果、下刈の実施後に行う現地検査時にシカネット及び植栽木の被害状況を確認し、シカネット設置の効果を「見える化」しました。このことにより、シカネットの被害状況を情報共有するとともに、早期の補修へ取り組む必要性があることが分かりました。

また、シカネットの内側に大苗を植栽し、更にその内側に植栽した普通苗が視認されないよう工夫する新たな実証実験を行いシカネットのメンテナンス等に加えるなど複数の対策を取り入れた事業の取組を行いました。

4 考察

シカネットによる食害対策については設置するだけで無く、巡視、補修などの適切な管理を行うことにより、その効果が発揮されることが再確認できました。

また、大苗の裸苗を植栽する場合、2分の1程度の枝葉を落とすことにより活着率の向上が図られました。

いくつか解決すべき課題はあるものの、今後は、実証実験から事業ベースへと規模を拡大し、本格的な実施を目指すこととします。